

## 当事者の記述にみる多胎育児の特徴 「不安」, 「大変」, 「上の子」

著者	越智 祐子
雑誌名	名古屋学院大学論集 社会科学篇
巻	53
号	4
ページ	245-253
発行年	2017-03-31
URL	<a href="http://doi.org/10.15012/00000909">http://doi.org/10.15012/00000909</a>

[論文]

## 当事者の記述にみる多胎育児の特徴

— 「不安」, 「大変」, 「上の子」 —

越 智 祐 子

名古屋学院大学経済学部

### 要 旨

2015年度、ぎふ多胎ネットは多胎妊娠・出産・育児の体験について、当事者やその家族から自由記述テキストを集めた。本稿では、当事者が実施した親和図法による分析から導出されたキーワードである「不安」と「大変」に着目したうえで、テキストデータを計量的に扱い、多胎育児者の妊娠・出産・育児体験についての考察を試みた結果、「不安」「大変」に加えて「上の子」への気遣いやケア資源の割り振りがキーワードとなっていたことを報告する。

キーワード：多胎育児, 自由記述, 家族関係

## Changes of Keywords: A Text Analysis of Experience in Multiple-birth Childcare

Yuko OCHI

Faculty of Economics  
Nagoya Gakuin University

---

発行日 2017年3月31日

## 1. はじめに

多胎育児支援は現在、当事者組織によるセルフヘルプを中心に、医療や保健行政の理解を得て取り組まれている。制度化に至っていないボランティアな活動も多く、多胎育児支援の質や量には大きな地域差がある。これは、当事者組織が存在するかどうか、またその持つちからや行政との関係のありように、地域間で大きな相違があるからだ。

近年、当事者組織の活動は成熟してきており、組織同士のネットワークも広がりを見せている。支援は少しずつ充実してきていると考えられるが、一方では、多胎育児の特徴や困難さについて、当事者でない人々の理解を得ることは依然として難しい。同じような経験を持つ当事者同士、高い共感を持って「わかるわかる」とすぐに納得できることは、同時に、伝えることばを探す経験を重ねる機会が少ないことでもある。当事者組織は、自分たちについて、他者に説明することばやツールを探索しているのだ。

このような文脈下で、多胎育児支援分野で活動するNPO法人「ぎふ多胎ネット」は、2015年度に『ぎふ多胎家庭白書1』を作成し、多胎育児家庭の現状について詳細に報告した。本研究では、ぎふ多胎ネットのデータを用いて、1歳未満の多胎児を育てる経験と感情はいったいどのようなものなのか、キーワードから明らかにしたい。具体的には、育児者たちの自由記述欄の内容を集計し頻出語を見つけ、キーワードを明らかにする。さらに関連語から、キーワードの意味内容を時期ごとに検討する。

## 2. 研究の背景

大木・彦(2016)は、多胎を対象とした研究の動向を3種類に整理した。1には最も研究の歴史の古い、ふたごを利用した遺伝と環境に関する研究であり、2には多胎に関する医学的な研究であり、3には最も研究の歴史の浅い、支援に関する研究である。

支援に関する研究の例として、多胎育児者への質問紙調査やインタビュー調査結果から、多胎育児者の育児負担感の検討(武藤他2010)や、多胎育児者が感じる社会的困難についての検討(越智・横田2011)といった、多胎育児者の心理社会的側面に焦点をあてたものがある。これらは、直接負担感や困難感を扱っており、支援策についての議論を含んでいる。支援に関する直接的な研究でなくても、多胎妊娠および出産は医学的にハイリスク妊娠・出産であることは、医療関係者には知られており、多胎の予防や管理、心身の負担軽減といった実践につながる研究は多い。ここまでの「支援」は医療保健専門職の「支援力」とも言うべき技術的向上を暗黙の前提としたものと言ってよい。

これらに対して、別の枠組みの支援とも言うべき、セルフアドボカシーに焦点をあてた研究と実践が存在する(越智2013)。多胎育児者たちが、自分たちについて自分たちで説明することを目指し、そのことを支援する取り組みである。本研究は、この多胎育児者によるセルフアドボカシーの研究と実践の系譜に連なる。2015年度、NPO法人ぎふ多胎ネットは、多胎妊娠・出産・

育児の体験について、当事者やその家族から自由記述を集めた。具体的には、妊娠期から入園期までを7つの期間に分けた上で、それぞれの時期に起こったできごとと当時の気持ちを思い出し、自由に綴ってもらうという方法で、147人から回答を得た。基本的な内容は『ぎふ多胎家庭白書1』に詳しいが、親和図法により、多胎育児当事者自身の手で整理された内容を簡単に紹介すると、「不安・負担が先行する妊娠期」から「安心・感謝と不安な気持ち」で迎える出産を経て、育児期に入り「生活一変」した後、「子どもの成長にともなう生活の変化」「ただただ大変」な時期を経て「悲喜こもごも」な毎日へと至る（ぎふ多胎ネット2016）。

本稿では、親和図法による当事者の分析結果を踏まえた上で、自由記述の計量的分析を非多胎育児者である筆者が実施する。このことによって、当事者によるデータの解読および意味づけを側面的に補強し、セルフアドボカシーの一助となることが期待できる。

### 3. 方法

ぎふ多胎ネットが2015年に実施した質問紙調査の個票について、テキスト解析ソフトKH coderを用いて分析をおこなった。

まず調査概要だが、調査項目は、多胎妊娠・出産・育児についての経験を尋ねるもので、①妊娠期、②出産時、③生後0～1ヶ月まで、④1～4ヶ月まで、⑤4～10ヶ月まで、⑥10ヶ月～2歳まで、⑦2歳～入園前までの7区分に時期を分割した上で、それぞれの時期に起きたできごとと、その頃の気持ちを思い出して自由に記述するものである。

調査対象は、岐阜県内に住む多胎育児者およびその家族である。調査票は、2015年7月から9月のあいだにぎふ多胎ネット実施の事業の参加者に対して手交で配布された。配布に際して、多胎育児の社会的理解促進を目的とした調査であること、結果は回答者が特定されないかたちで公表されることが説明された。具体的には、『ぎふ多胎家庭白書』をはじめとするぎふ多胎ネットの事業のなかで活用されることと、筆者が学術研究目的で利用公表することの了承を求めた。またあわせて、調査票は配偶者や父母等にも記述してもらえるように依頼している。調査票は、120人の参加者とその家族に配布され、147票が回収された。

次に分析の手順を述べる。7区分中、妊娠期から1歳になるまでの5つの期間（①～⑤まで）について、「できごと」の回答と「気持ち」の回答をひとまとまりの文章とみなし、回答者ごとにテキストデータを作成した。調査票では「できごと」について記載する欄と、そのときの「気持ち」について記載する欄は区別されていたが、回答者によっては区別せずに記入していたり、内容的に明確に区別されていない場合も散見されたので、ひとまとめのテキストとして扱うことにした。KH coderで分析をする前処理として、同じものを指すと考えられる語について用例を確認し、同じ事象を指していると判断できた場合に、表記を統一し、人称の視点を固定する作業をおこなった。具体的には「生まれる」と「産まれる」を「生まれる」に統一したり、「お兄ちゃん」「お姉ちゃん」「上の娘（息子）」「上の子」について、「上の子」に統一する等の作業をおこなった。KH coderを用いて、時期ごとに頻出語のリストを作成し、比較することでキーワードを同

定した。次に、時期ごとに語同士の共起関係をKHcoderで描画し、検討した。そして最後に、キーワードの意味内容について、時期横断的に考察をおこなった。分析対象を1歳になるまでの期間としたのは、多胎育児者たちがこの時期について、「覚えていない」「思い出したくない」と表現することが少なくなく、多胎育児の特徴や難しさが端的に表れると考えたためである。

## 4. 結果と考察

### 4.1 頻出語と変化

各時期の頻出語を出現数の降順に上位10語を表1に示す。全体を横断的にみると、出産するまでの「不安」は、出産後、育児が始まると「大変」にとってかわるようすが理解できる。また、全体を通じて「上の子」への気遣いや具体的なケアをどうするかが大きな関心事となっていることがわかる。

表1 各時期の頻出語

	①妊娠		②出産		③～1ヶ月		④～4ヶ月		⑤～10ヶ月	
	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
1	入院	161	出産	111	退院	73	大変	72	大変	62
2	妊娠	78	生まれる	97	大変	61	泣く	62	ふたご	61
3	上の子	69	帝王切開	95	入院	61	ふたご	53	子ども	44
4	ふたご	60	無事	55	母乳	61	ミルク	53	離乳食	33
5	出産	58	手術	49	上の子	49	上の子	53	自分	32
6	不安	58	予定	41	ふたご	46	実家	43	時間	31
7	お腹	45	ふたご	32	時間	43	夫	43	泣く	28
8	妻	45	不安	31	病院	42	授乳	39	出る	25
9	辛い	38	分娩	31	ミルク	39	時間	38	上の子	25
10	大変	37	本当に	31	授乳	36	自分	37	妻	24

各時期でみていくと、まず、「①妊娠期」には、「入院」が抜きんできて多く使用されていることが分かる。多胎妊娠では、安静を保持し早産を防ぐために、管理入院を指示されることが少なくない。妊娠中に起きたできごとやそのときの気持ちを想起したときに、入院のイメージが出てくることは、多胎妊娠ではごく当然のことであると同時に、特徴的なことだと考えられる。次いで注目したいのは、頻度3位の「上の子」である。用例は「入院して上の子がさみしがっていた」や「2回の入院で、上の子にとっても辛い思いをさせてしまった」である。入院によって、予定されていた上の子の行事への対応が困難になってしまった、というテキストもあった。頻度5位は「不安」であり、「妊娠期の喜びよりも、不安の方が多く毎日心配していた」「多胎育児のイメージがわからず、出産が楽しみでもあり不安でもあった」等に代表される、ふたごを生み育てることへの漠然とした不安が伝わってくる。また、頻度の10位には「大変」がある。

「②出産時」については、「帝王切開」や「手術」が終了し、無事に生まれてきたようすがわかる。一方で、頻度8位には「不安」があり、この用例は「赤ちゃんたちの顔を見るまではずーっと不安でした」に代表される、出産や手術への不安に関する記述である。緊急手術となった人も多く、「低体重と言われて不安」や「なかなか保育器から出てこれなかったので不安」、「子どもに何かあるのではと不安」と言った、一般的な単胎の出産に比べて早い時期の出産となったり、小さく生まれたことへの不安もあった。妊娠中と比較すれば、出産後の不安は、体重が低いとか早産といった事実を端を発する具体的なものだと言える。

育児期に入り、「③生後0～1ヶ月まで」の時期では、「退院」が出現数1位、「入院」が3位の語となっている。NICUやGCUにふたごが入院していたり、退院してくるようすが伺える。そして出現数2位には、育児に特徴的な語である「大変」が登場する。この用例は、「夜中のミルク作り。2本冷やすのは大変!」「交互に泣いて大変」と言った、心身が疲弊しているところへ授乳等のケアが同時または交互に必要となる大変さであり、また「体がまだしんどくて、毎日面会に行くのが大変」に代表される、ふたごが病院にいて、母乳を届ける等の行為の大変さである。後者については、出産時の具体的な不安が、そのまま具体的な大変さに変化したと言ってよいだろう。その後、「④1～4ヶ月まで」、「⑤4～10ヶ月まで」の2つの時期でも、「大変」が頻出語となっている。特に「⑤4～10ヶ月まで」の時期は、これまでのケアに関するものに加えて、外出に関するものが加わるのが特徴である。「外出して気分転換したいのだが、3人連れて移動するのは大変で家にこもりがち」「(引用者注：ふたご用ベビーカーは)エレベーターに乗らなかつたりレジが通らなかつたり大変」が、外出の大変さについての代表的な記述である。また、ふたごや家族が病気になったときの大変さについても「病気になると、本当に本当に大変です」等の用例がある。

さらに、出産時を除くすべての時期で、「上の子」は常に出現数の上位に位置している。多胎妊娠・出産・育児では、上の子が大きな存在となることを示している。具体的には、多胎児のケアに人手がかかり上の子のケアを十分に担当できないという、物理的負担と、心理的負担が高くなるということである。用例には、「上の子にはいつも寂しい思いをさせていたのではないかという不安感」「上の子の相手を第1にと思ったがなかなかできなかった」(どちらも「⑤4～10ヶ月まで」)等がある。

## 4.2 共起ネットワーク

ここでは、時期ごとの頻出語がどのように関連しているか、その共起性に注目して報告する。前項では、頻出語に注目して、キーワードが「不安」「大変」「上の子」であることを確認し、用例を紹介した。本項では、キーワードを含めた頻出語が、どのような文脈の中で出現するのかを改めて確認したい。

ひとり分の記述を分析単位として、同時に出現(共起)することの多い語同士を線で結んで図示したのが図1～図5である。共起性の測度は0～1の間の値をとるjaccard係数で、0.2より大きい場合に共起性が高いと判断し、線を引いている。係数が大きくなるほど線が太くなるように描

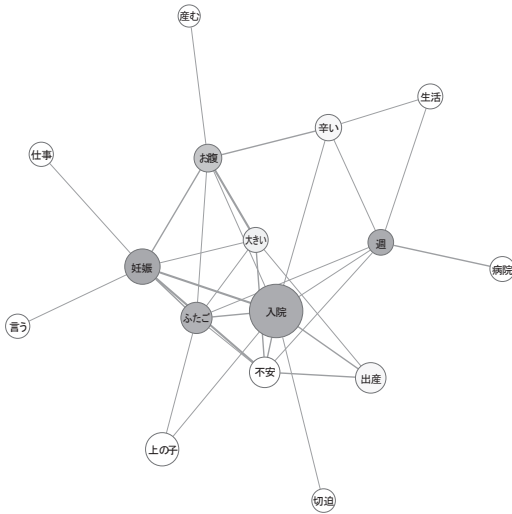


図1 ①妊娠期の共起ネットワーク

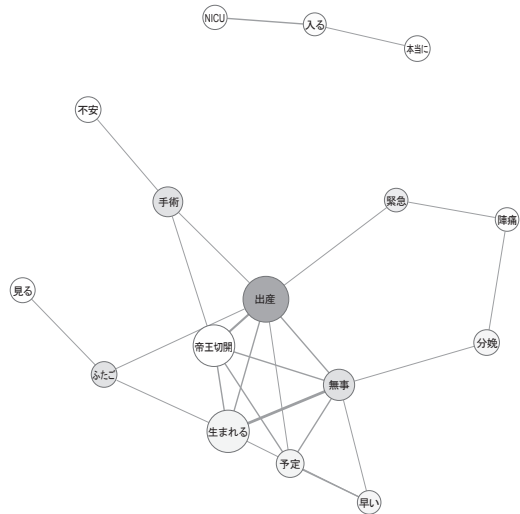


図2 ②出産時の共起ネットワーク

画している。また、分析に用いる語の選択については、出現回数が20回以上の語に限定することとし、円の大きさと相対的な出現数の大小を表現した。円同士の距離の遠近は特別の意味をもっていない。なお円の色の濃淡は、媒介中心性の表現になっているが、本稿では議論しない。

まず、「①妊娠期」について図1をみると、「妊娠」と「出産」は共起するわけではなく、「入院」を介することがわかる。つまり、多胎においては、「妊娠」は出産に直結するのではなく、ふたごの妊娠や入院の不安という文脈で語られ、出産は入院や不安とともに語られるのだ。また、「不安」は「妊娠」「ふたご」「入院」「出産」との共起性が高いことがわかる。「大きい」との間にも線が引かれており、この時期は、ふたごの妊娠がその後出産までどのような経過をたどるのか、その不安が大きいことが理解できる。「上の子」は「ふたご」「入院」と関連しており、不安との間の関連は強くない。

次に「②出産時」について図2をみると、「無事」「生まれ」だが、それは「予定」より「早い」「帝王切開」「手術」による「緊急」事態の結果であったことが推測できる。「不安」は「手術」との結びつきが強い。

「③生後0～1ヶ月まで」について図3をみると、「NICU」と「入院」の共起性が高いことがわかる。「母乳」「退院」の間、「搾乳」「届ける」の間に関連があることをあわせて考えると、この時期多胎児はNICU等に入院しており、母親はすでに退院している。そして、自宅から搾乳をしてNICUに届けていることがわかる。そして「大変」は、「入院」だけでなく「上の子」「授乳」「ふたご」と関連している。このことから、この時期の大変さは入院児がいたり、自宅で授乳や寝かしつけのケアを必要とする児がいたり、さらには上の子のケアも必要だということ、複数のケア対象児が複数箇所が存在することの大変さであることが推測できる。「上の子」は「時間」とも関連しており、意のままにならない時間のやりくりの影響が上の子に出ているのではないかと気遣いも透けて見える。

当事者の記述にみる多胎育児の特徴

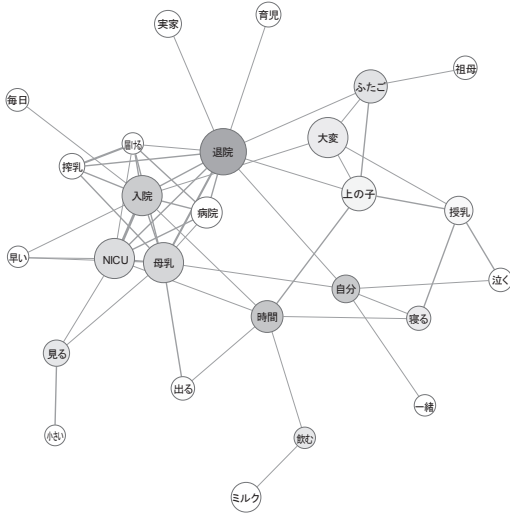


図3 ③～1ヶ月の共起ネットワーク

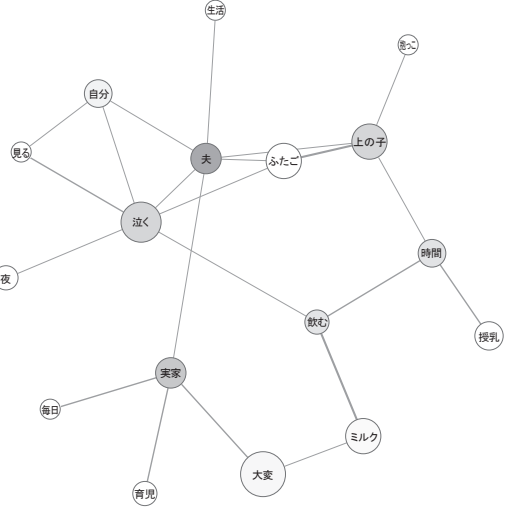


図4 ④～4ヶ月の共起ネットワーク

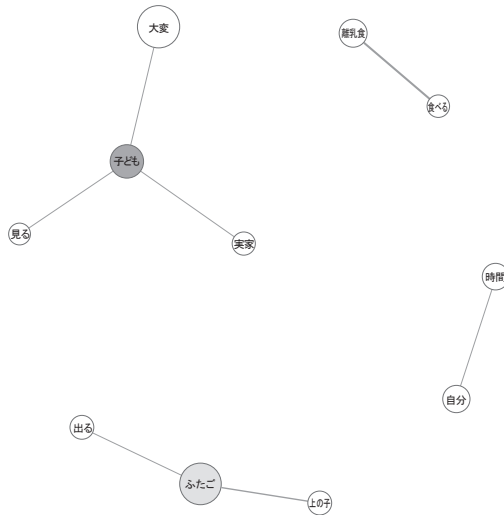


図5 ⑤～10ヶ月の共起ネットワーク

「④1～4ヶ月まで」について図4を見ると、「大変」は「実家」と共起性が高い。多胎児のケアについて、実家からのインフォーマルなサポートを受けているようすが推測できる。一方で、「実家」は「夫」とも結びついており、さらに「夫」は「ふたご」「上の子」と共起している。要するに家族関係に関する文脈のなかに「実家」は位置づけられており、単純にサポートを得られる相手というわけではなく、複雑な関係があることが示唆される。

最後に「⑤4～10ヶ月まで」について図5を見ると、これまでの時期と比較すると極端に語同士の結びつきが減少しており、記述の多様性が伺える。「大変」は「子ども」と共起しており、



ケア対象としてだけではなく、家族の一員としての「子ども」と接することが大変であるようだ。「上の子」は、これまでの時期と共通して「ふたご」と結びついており、「ふたご」は「出る」と共起する。ここで「出る」は、意味内容として外出を含んでおり、子どもたちの成長とともに、外出をめぐる経験が増加していることがわかる。

## 5. おわりに

本稿では、多胎育児当事者とその家族が回想して書いた自由記述テキストを計量的に分析することで、妊娠期から出産を経て、1歳に至るまでの経験のキーワードを「不安」「大変」「上の子」と整理し、各時期における意味内容を明らかにすることを試みた。出産するまでの漠然とした「不安」は、出産後、育児が始まると「大変」にとってかわる。特に、妊娠期においては妊娠イメージが出産イメージに直結するわけではなく、間に入院のイメージが割って入ることが明らかになった。また、妊娠期から1歳になるまでの全期間を通じて、「上の子」への気遣いや、具体的に誰が上の子のケアを担当できるかが、大きな関心事となっている。一般的には、初産が多胎出産となるケースが多いと考えられるため、少数派である上の子がいるケースでは、多胎の経験について語る際に、上の子について言及する割合が非常に高いことが示唆される。多胎児を「平等に扱うこと」への多胎育児者たちの気遣いについては、すでに報告されている（越智・横田2011）が、「上の子」と「ふたご」とのバランスについての気遣いも大きな関心事となっている。さらには、「大変」は「実家」との関連でも語られており、実家はケア面でサポート資源であることが推測できる反面、複雑な家族関係のマネジメントが必要となることも想像に難くない。

以上の分析結果を用いれば、多胎育児者たちが「大変大変って、何がどう大変なの」と問われたときに、自分やなかまの経験を利用して説明することが可能となる。一方で、単胎の経験との比較はされていないため、このままでは明確なかたちで「単胎の経験とはこのように異なる」と示すことはできない。比較データの収集について検討する必要があると考える。

本稿の分析は、時期のみを考慮したごく単純なもので、記述者の性別等の属性ごとの検討はおこなっていない。記述者の属性等の違いによって、記述内容が異なっている可能性があるため、今後はより詳細な分析をおこないたい。

## 謝辞

本研究はJSPS 科研費JP16K04115の助成を受けたものです。

ぎふ多胎ネット理事長の糸井川誠子さんはじめ、みなさんとの議論と協働によって、本研究は進められました。

## 付記

本稿は、「日本双生児研究学会第31回学術講演会」での口頭報告と議論をもとに執筆した。

## 引用文献

- 樋口耕一, 2014, 『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—』ナカニシヤ出版.
- 武藤葉子・岩坂英巳・郷間英世・郷間安美子, 2010, 「乳幼児期のふたごやみつごを持つ母親の育児負担感の検討」『教育実践総合センター研究紀要』(19), 219-222.
- 越智祐子, 2013, 「〈声なき少数派〉による自己表現の検討: 多胎育児体験の映像作品化」『同志社女子大学研究年報』(64), 19-25.
- 越智祐子・横田恵子, 2011, 「多胎育児の社会的困難: 母親へのインタビュー調査から」『神戸女学院大学紀要』58(2), 65-78.
- 大木秀一・彦聖美, 2016, 「多胎家庭を対象とした育児支援と研究の両立」『石川看護雑誌』13, 11-20.